



Title	首長系譜にみる埴輪製作者の動態
Author(s)	和田, 一之輔
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 441-450
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105060
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

首長系譜にみる埴輪製作者の動態

和田 一之輔

はじめに

埴輪生産への理解 埴輪の生産と供給は、発展段階的に理解するのが常套であった。吉田恵二は、客窯の導入を契機として埴輪生産が「固定化」することで「大量生産性・集中的生産性」と「一元的供給」が実現したと理解した（吉田 1973 : p. 43）。これを発展的に継承した高橋克壽は、埴輪生産を「特殊な手工業の発達過程」ととらえ、そこに「地域首長の自立化の過程」をみた。埴輪生産の「専業」性、「固定化」と「定着」、「一回性」と「継続」性、「首長」からの「自立」、そして埴輪の「商品的側面」といった諸概念を手がかりに説明したわけだ（高橋 1994）。

いっぽう、廣瀬寛はこうした発展的な図式を敢然と批判し、埴輪生産をこうとらえる。「古墳の築造動態にあわせて最も合理的な手段を選択しているに過ぎない」（廣瀬 2023 : p. 293）、と。

筆者は、一定の発展性は認めつつ、埴輪生産は首長の管理下にあると理解し、古墳の築造動向にあらわれる地域社会構造がその背景にあると考えてきた。しかし、同様の地域社会構造を示しながらも、同じ生産供給体制が構築されるわけではなさそうだ。

本稿の目的 粗削りながらも熟慮した議論を重ねる路、実証性の高い事例を蓄積する路。一見すると理解が深められたような模式図を示し、性急に図式化をすすめているようにもうつるし、体系的に理解しないままいたずらに個別事例の分析のみに終始するきらいもある。

根拠のあいまいな見解を披露し、いたずらに押し問答を応酬するよりも、本稿は堅実な個別事例の蓄積に注力したい。北山城の乙訓地域（図 1）を対象にひとつの実態を提示すること、後期の埴輪生産体制と編成、そのもととなる埴輪製作者の動態の解明を試みる。

1. 後期にみる埴輪系列と埴輪製作者の動態

（1）首長系譜にみる埴輪生産—上里・井ノ内系譜—

古墳築造の動向 MT15 ～ TK10 型式期にかけて芝 1 号墳（方円 32m）、井ノ内車塚古墳（方円 39m）、井ノ内稲荷塚古墳（方円 46m）と継起的に前方後円墳が築造される（図 2）。右片袖式横穴式石室を埋葬施設とする点で共通し、系譜的連続性をうかがえる。この首長系譜は井ノ内稲荷塚古墳の築造をもって途絶えるようにもみえるが、横穴式石室への 2 回の追葬を考慮す

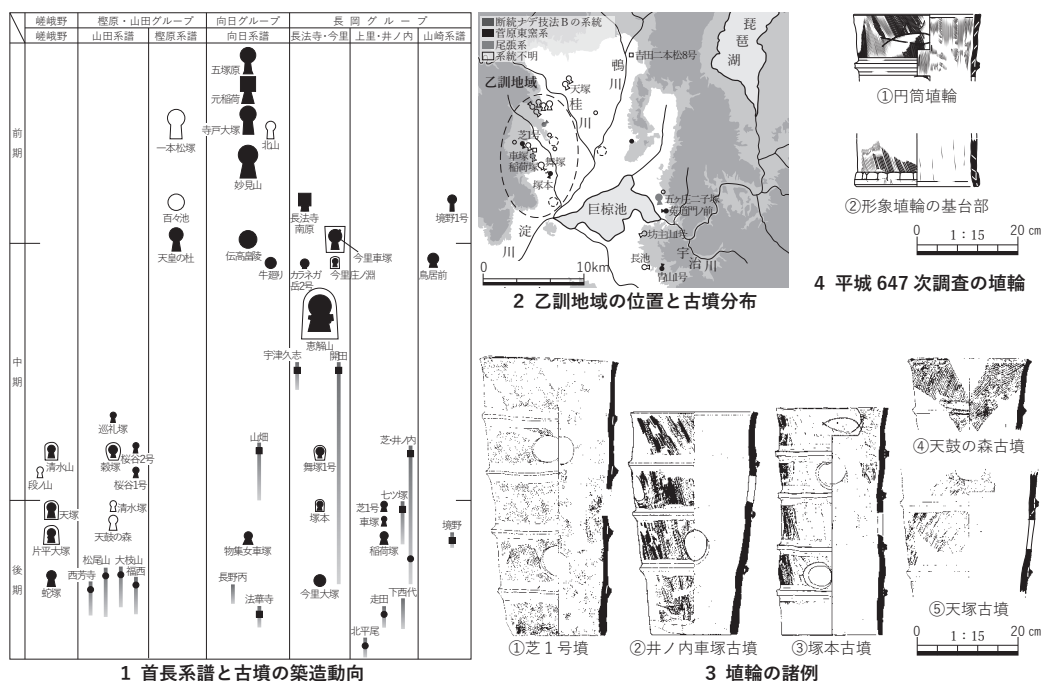


図1 乙訓地域の首長系譜と埴輪系列

れば、前方後円墳の築造こそ停止したものの、首長の存在はその後もつづくのだろう。

ほぼ併行して、木棺直葬と思われる小型方墳が展開する。この有力構成員の墳墓は、井ノ内稲荷塚古墳の築造後には円墳化するようである。先行する方墳群と後続の円墳群とでは墓域をやや違えるなど興味深い、実態は不明である。このほかに、墳丘をもたない土壌墓もみられ、構成員の墓と理解できよう。

墳丘の有無、墳形と規模、埋葬施設の種類の、埴輪の有無を基準として、首長、有力構成員、構成員という3つの階層からなる社会構造を復元できる。

これらとやや離れて南方には、長法寺七ツ塚古墳群が展開する。前方後円墳の4号墳を頂点に、小型方墳が従属するかたちである。埋葬施設を木棺直葬とし、墳丘規模が小規模なので、芝1号墳や井ノ内稲荷塚古墳よりも相対的に下位に位置づけうる。地理的な距離とまとまりをもつ築造動向からは、両群はそれぞれに自立した社会集団の営みと理解できるが、枕木式木棺(瀬川 2005)を共通して採用する状況からは両者の有機的な関係性もうかがえる。

埴輪生産の動態 継起的に築造された、芝1号墳と井ノ内車塚古墳の埴輪を比較してみよう。この系譜の首長墳は墳丘規模を順次増していく傾向にあるいっぽうで、円筒埴輪は器高55cmほどの4条5段構成(連段直交式)から器高45cm程度の3条4段構成へと減じ、最後の井ノ内稲荷塚古墳では埴輪の樹立そのものがなくなる。円筒埴輪の階層性の基準が変化したと考える余地もあるが、埴輪生産への省力化とみることもできよう。前代の首長墳の埴輪を基準に、

それを超えない範囲で階層表示と省力化を同時に達成したものと理解しておきたい。

芝1号墳の埴輪は内面ハケ調整のⅡ類⁽¹⁾を基調とし、外面タテハケ調整が右上がりとなる左利きの工人が多い。井ノ内車塚古墳では、内面ナデ調整のⅠ類が主体でⅡ類は少ない。ハケメパターンをみると（図3～5）、それぞれ12種前後⁽²⁾を確認できる。両墳で共通するハケメパターンはみられず、口縁端部に半円形削込をもつ個体同士でも一致しない。

両墳に樹立した埴輪の量は、各300本ほどと予想される。確認できたハケメパ

ターン数からすれば、従事した工人の人数が10人より少ないとは思えないので、仮に10人が1日に1本の埴輪を製作したとすれば、300本の埴輪は30日でまかなえる。これは単純な粘土造作だけの試算だが、粘土の採掘から埴輪の乾燥と焼成、窯の構築・修繕と燃料の確保にいたるまでの諸労働を加味しても、1年を超える時間を要したとは思えない。そうであれば、一世代約20年ごとに首長の方後円墳を築造する間隔では、あるいは60年間で1,000本に満たない生産量では、一首長系譜、一小地域だけで埴輪生産を持続的に維持できたとは到底考えられない。

とすれば、隣接するあるいは遠隔地にある別の首長系譜とのあいだに、埴輪生産つまりは埴輪製作者を共有するような体制があった可能性も検討しなければならない。

（2）地域における埴輪生産

同一の首長系譜かつ埴輪系列にありながら、連続する首長墳間に同じハケメパターンの埴輪

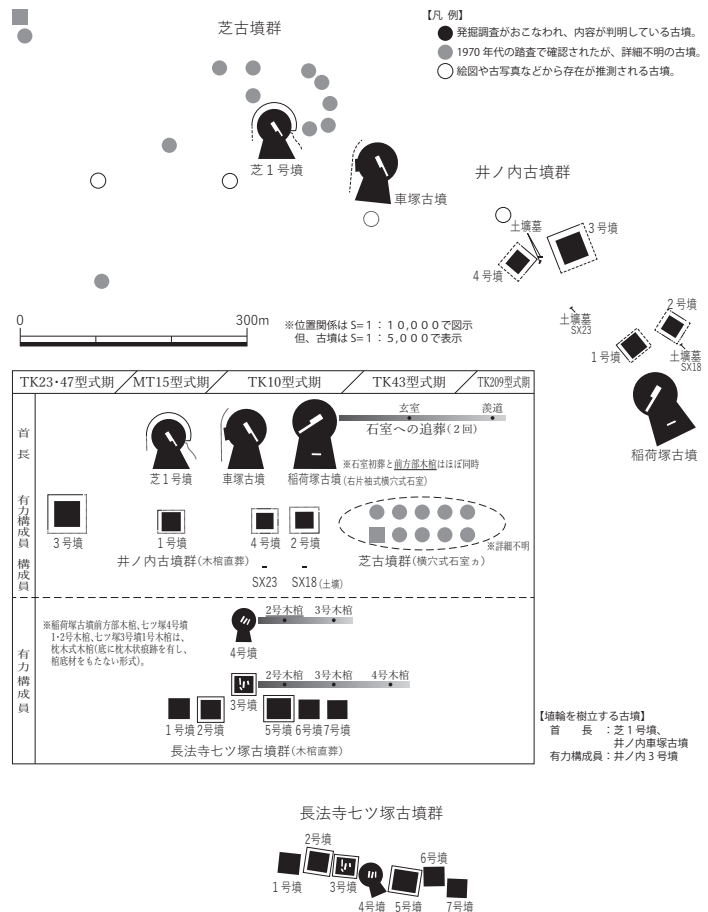
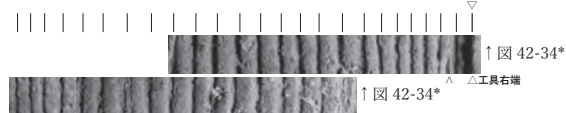
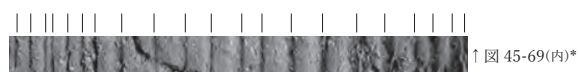


図2 上里・井ノ内系譜における後期古墳の展開

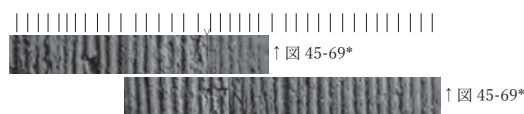
①円筒埴輪（4条5段連直交，Ⅱ類，底部調整：外面板オサエ，右利き，口縁部刳込）



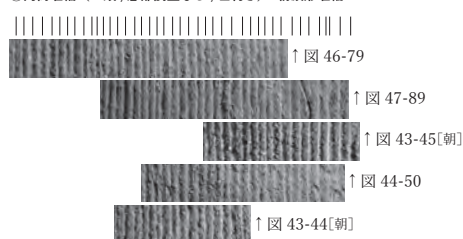
③円筒埴輪（Ⅱ類，左利き）



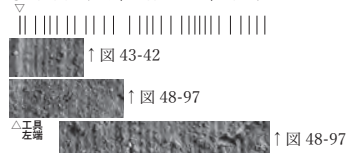
③'円筒埴輪（Ⅱ類，左利き）



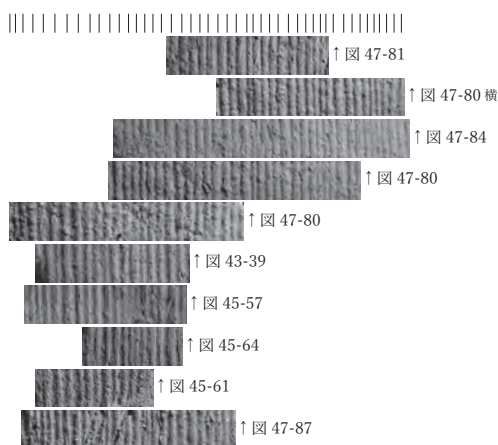
④円筒埴輪（Ⅱ類，底部調整なし，左利き）・朝顔形埴輪



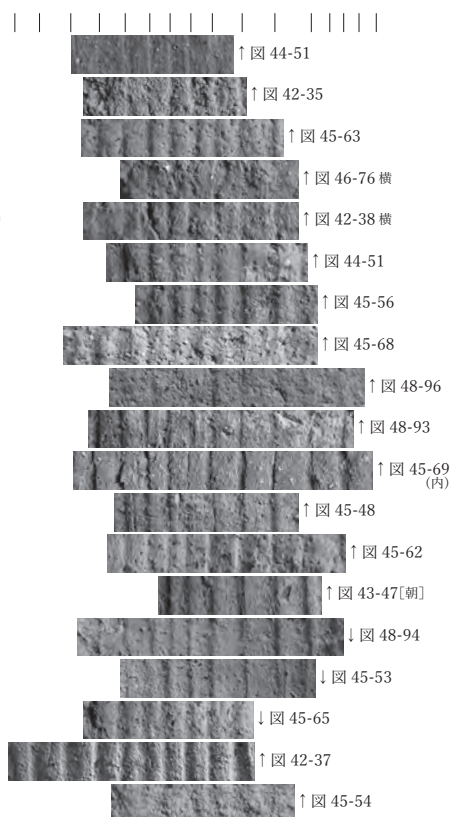
⑤円筒埴輪（Ⅱ類，底部調整なし，左利き）



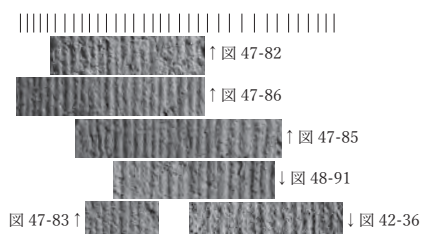
⑥円筒埴輪（Ⅱ類，底部調整：内外面ケズリ，左利き）



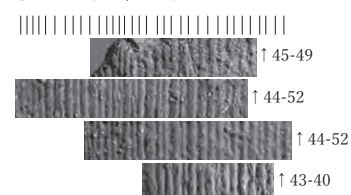
②円筒埴輪（Ⅱ類，底部調整なし，左利き）・朝顔形埴輪



⑦円筒埴輪（Ⅱ類，底部調整：内外面ケズリ，左利き）



⑧円筒埴輪（Ⅰ類，左利き）



【凡 例】

〔朝〕朝顔形埴輪、(内)内面、横はヨコハケ調整を意味する。それ以外は円筒埴輪、外面、タテハケ調整を示す。↑はハケ工具の動く方向。
図○-○は『芝古墳調査総括報告書』（京都市2009年）の挿図番号に対応する。＊は複数の画像を合成した（△は画像を接合した箇所）。

図3 芝1号墳の埴輪ハケメパターン（1）

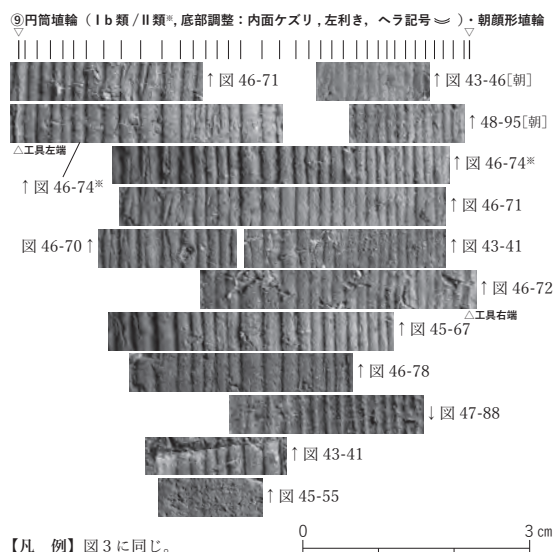
を認識できない事実は埴輪生産の維持管理のあり方を問いかける。

そこで、近隣系譜の同時期に築造された首長墳の埴輪をみていこう。具体的には、嵯峨野系譜の天塚古墳（方円 71m）、山田系譜の天鼓の森古墳（方円 80m）、長法寺・今里系譜の塚本古墳（方円 30m）をとりあげてみよう⁽³⁾（図 6）。

地域内の生産動向 天塚古墳と天鼓の森古墳は良好な埴輪を欠き全容は不明だが、どちらも左利き工人が卓越する（図 7）。芝 1 号墳でも同じ傾向を看取できるが、同じハケメパターンは認められない。

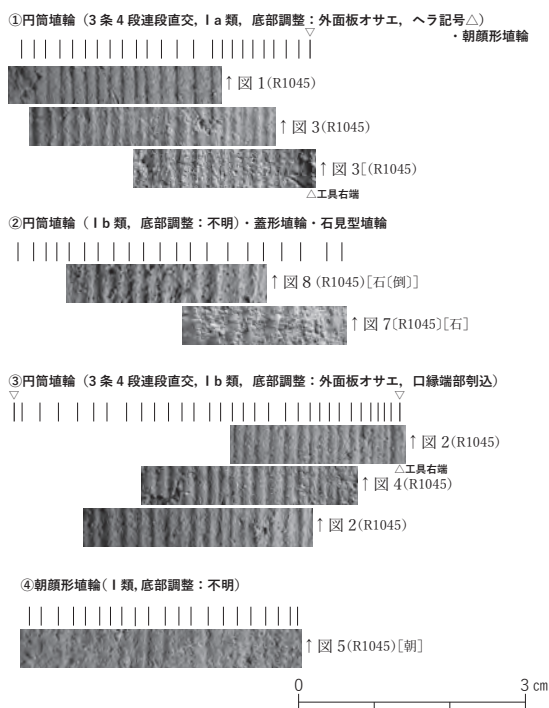
いっぽう、塚本古墳の円筒埴輪は器高 50cm ほどの 4 条 5 段構成の連段直交式を基調とし、隔段直交式もみられる。また、5 条 6 段構成の大型品と 3 条 4 校構成の小型品も少量存在する。底部調整には外面の板オサエ調整あるいは内面のケズリ調整がみられ、2 分割型の石見型埴輪や指頭圧痕を残す底部突帯をもつ形象埴輪の基台部も含めて、南山城地域から北大和地域にかけて展開する埴輪系列の好例である。とくに、連段直交の透孔配置、口縁端部の半円形削込み、ケズリによる底部調整といった諸特徴を備える円筒埴輪の様相は、芝 1 号墳や井ノ内車塚古墳とも共通し、同一の埴輪系列と認識してよいものだ。

塚本古墳のハケメパターンは、30 程度⁽⁴⁾を確認できそうだが（図 8）。12 種類ほどのヘラ記号が小集団を意味し、そ



【凡 例】 図 3 に同じ。

図 4 芝 1 号墳の埴輪ハケメパターン（2）



【凡 例】

〔朝〕朝顔形埴輪、〔石〕石見型埴輪、〔倒〕倒立技法を意味する。それ以外は円筒埴輪を示す。↑はハケ工具の動く方向を示す。
図○は『乙訓古墳群調査報告書』（京都府 2015 年）の挿図番号、R○は調査次数（右京○○）に対応する。

図 5 井ノ内車塚古墳の埴輪ハケメパターン

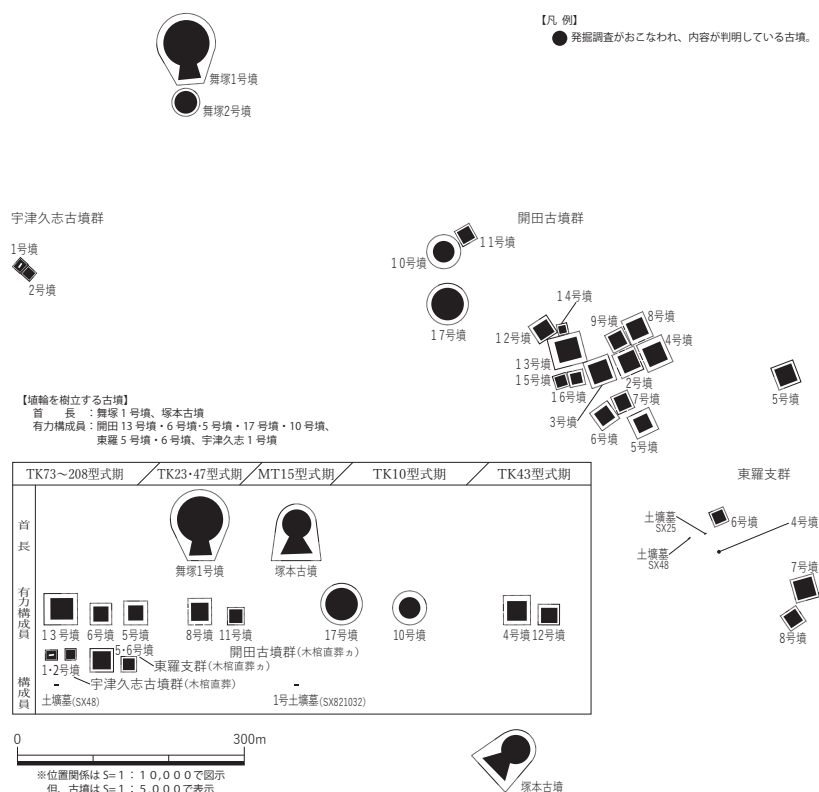


図6 長法寺・今里系譜における後期古墳の展開

のもとに複数の工人が帰属する組織編成をみてとれる。それでもなお、他系譜に属する同時期の諸古墳とのあいだに共通するハケメパターンを確認できない。

地域間の生産動向 地域内の動向に反して、塚本古墳のハケメパターン⑩が平城京左京一条二坊十坪出土の埴輪（平城第647次調査）と合致する（図8）。内面ハケ調整のⅡ類であり、ヘラ記号も一致するので、同工品と認識できよう。さらに、指頭圧痕をとどめる底部突帯をもつ形象埴輪の基台部も共伴しており、そのハケメパターン⑪も一致しそうだ。

これは、地域を越えて埴輪製作者がひろく移動する現象を明確に示す。それがハケメパターンと同工品から実証できるということは、埴輪製作者が刷毛工具を属人的に保持したまま移動する状況があったわけだ。地域を越えた移動時に刷毛工具を保持するのであれば、地域内の移動時でも同様だろう。にもかかわらず、地域内でハケメパターンが一致する事例がなく、遠隔地でもハケメパターンが一致する例が少ない現状について、どう理解すればよいのか。無論、一致例の確認が今後も期待されるが、塚本古墳で多くのハケメパターンを把握できる現状で一致例が少ないので、乙訓地域内で大半のハケメパターンが古墳間で一致するような事態にはならないだろう。南山城地域の青山1号墳と坊主山1号墳との合致例も参照すれば（和田2024：

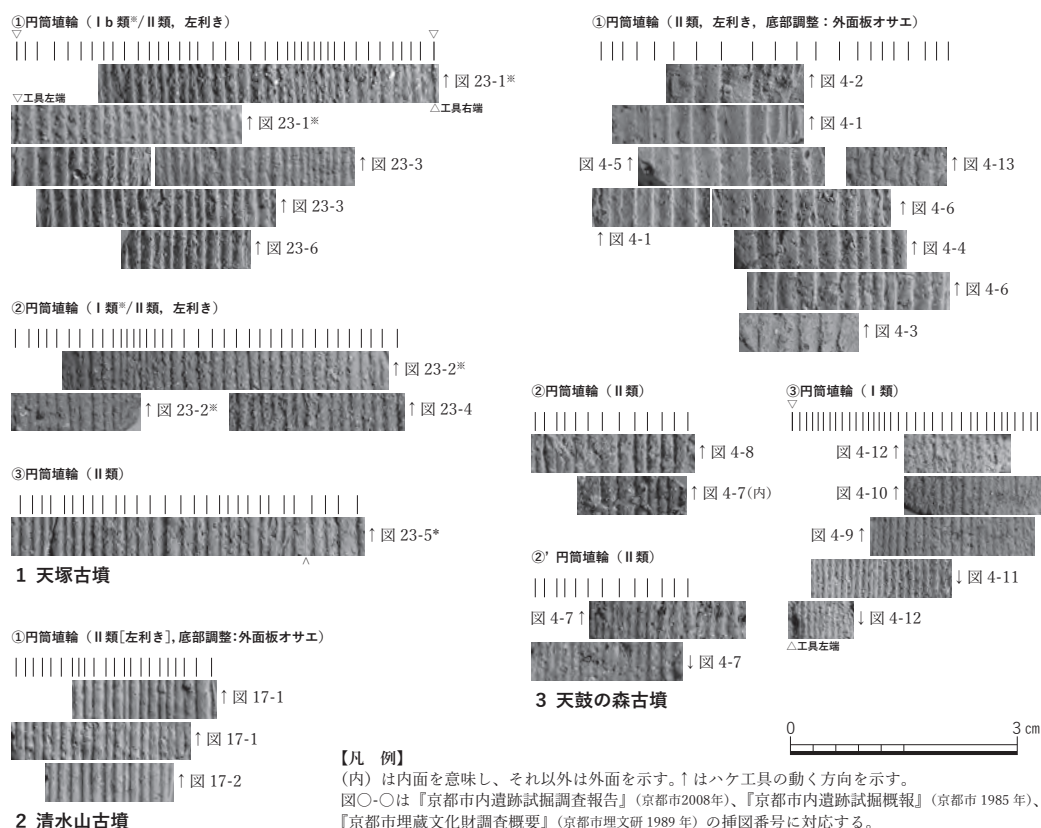


図7 嵯峨野系譜と山田系譜における諸古墳の埴輪ハケメパターン

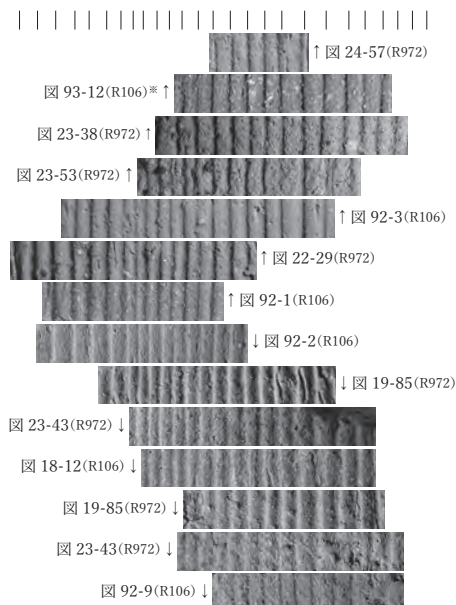
p. 83)、組織編成の全体ないし大半ではなく、ごく一部だけが一致するようだ。

また、埴輪製作者が移動する方向を特定することも、たいへんにむずかしい。刷毛工具は使用に応じて摩耗し、それがハケメに転写されるので、ハケメの観察から刷毛工具の摩耗度合いを読み取れば、製作の先後関係を把握できるかもしれないが、力の入り具合や接地角度、作業姿勢なども作用し、判断に躊躇するのが実情だ。そのうえ、同一母材起源の工具か否かの判断もまたむずかしい。

2. 埴輪生産の動態

ここまで、2つの事象をとらえてきた。ひとつは、連続する首長墳（芝1号墳と井ノ内車塚古墳）で同系列の埴輪を樹立するものの、ハケメパターンは一致しない事例。もうひとつは、隣接する首長系譜でもハケメパターンが合致しないなか、遠隔地間（塚本古墳と平城京左京一条二坊十坪）でハケメパターンが一致する事例。くわえて、埴輪生産に必要な年数は短期間であるという試算を考慮すれば、つぎのように考えられる。

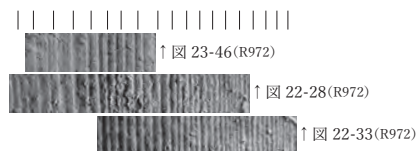
①円筒埴輪 (4条5段連段直交, I a 類 / I b 類, 底部調整: 外面板オサエ, ヘラ記号△)



②円筒埴輪 (4条5段連段直交, I b 類, 底部調整: 外面板オサエ, ヘラ記号△)



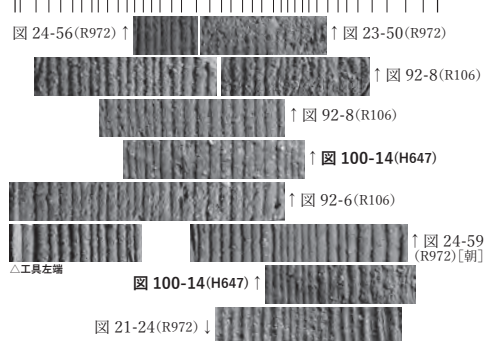
⑥円筒埴輪 (4条5段連段直交, I b 類, 底部調整: なし, ヘラ記号へ)



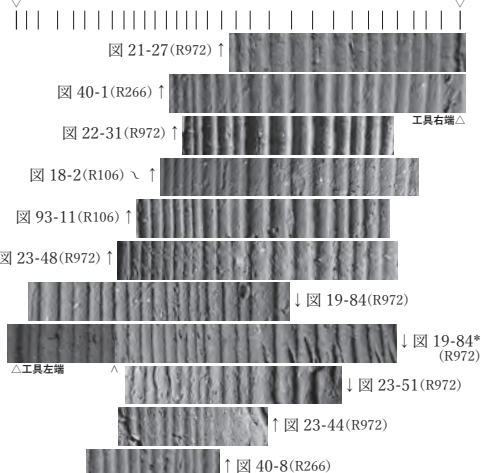
⑦円筒埴輪 (4条5段連段直交, I a 類, 底部調整: 外面板オサエ, 左利き, ヘラ記号ノ, 口縁端部削込)



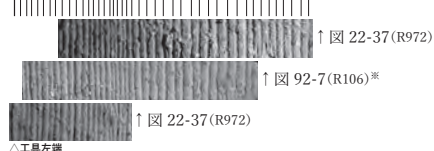
⑩円筒埴輪 (4条5段連段直交, II 類, 底部調整: 外面板オサエ / 内面ケズリ, ヘラ記号××) ・朝顔形埴輪



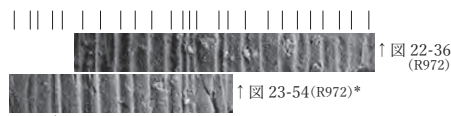
③円筒埴輪 (4条5段連段直交, I a 類, 底部調整: 内面ケズリ, ヘラ記号▽)



④円筒埴輪 (4条5段連段直交 / 隔段直交, I b 類, 底部調整: 内面ケズリ, ヘラ記号×)



⑤円筒埴輪 (4条5段連段直交, I b 類, 底部調整: 不明, 左利き, ヘラ記号×)



【凡 例】 図 3・5 に準じる。図○○(R○○) は長岡京市・京都府の各報告書と調査次数(右京○○)に、図○○(H647) は『発掘調査報告 2023』(奈良文化財研究所 2023 年)の挿図番号に対応する。

⑧円筒埴輪 (連段直交 I b, 底部調整: 外面板オサエ, 左利き)



⑨円筒埴輪 (4条5段隔段直交, I b 類, 底部調整: なし)



⑪円筒埴輪 (4条5段隔段直交, I b 類, 底部調整: 不明) ・石見型埴輪

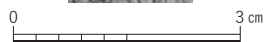
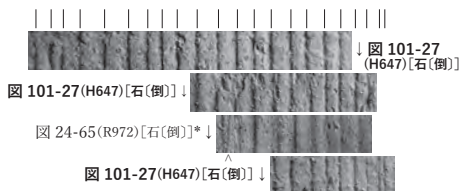


図 8 塚本古墳と平城京左京一条二坊十坪の埴輪ハケメパターン

固定化した拠点的な生産地は後期の乙訓地域には存在しなかった、と。この限られた範囲に陸続と中小規模の古墳を築造するなかで拠点的な生産地を設けない事実は、古墳築造動向に応じた素朴な合理性のみが埴輪生産の形態を決定しているわけではないことを意味しよう。物資の運搬に河川を利用できる地の利があるにもかかわらず、なのでなおのことだ。

しかし、古墳の築造動態の背後にある、首長の存在形態や階層構造といった社会構造をみると、一定の理解を得られる。後期の乙訓地域は、盟主墳の存在が不明確であり、同規模の首長墳が林立する状況にある。卓越した盟主的首長が地域内の体制を一元的に維持管理していたのではなく、分散的に存在する各首長がそれぞれ半ば自立的に埴輪生産を運用していたのではないだろうか。その生産組織も単発的であって継続しない。ひるがえって、長期継続的な埴輪生産を必要とする大型墳の築造なくしては、拠点的あるいは地域一元的な生産供給体制は構築されない、ともいえるかもしれない。

とはいえ、首長墳である天塚古墳、天鼓の森古墳、芝1号墳、さらには井ノ内車塚古墳と塚本古墳の埴輪は、4条5段連段直交式の形態、口縁端部の半円形刳込、底部ケズリ調整、あるいは左利き工人といった諸特徴を手がかりとすれば、同じ埴輪系列に属する製作集団による生産と認識できる。同一系列の埴輪が地域内にひろく展開するなかでも同じハケメパターンの埴輪を認識できない状況は、想像以上に集団の規模が大きいいうえにその移動範囲も広大であるからなのかもしれない。首長同士のつながりのなかで地域内で埴輪製作者が移動することもあっただろうが、離合集散の再編成がくりかえされ、生産組織を維持したままに移動したわけではない。同時に、その移動には遠隔地間の場合も多分に含まれ、その様相は一層複雑なものであった。だからこそ、今後は、地域ごとの状況を緻密に積み上げ、より広範な比較検討が必要だ。

おわりに

首長が埴輪生産組織を管理したと理解してはいるが、地域内あるいは地域を越えて埴輪製作者が移動する場合、その製作者はどのように首長の管理を受けたのか。埴輪製作者は首長から自立した存在とは考えていないが、派遣、上番帰郷、巡回といったいずれの形態であれ、実像を描きだすにはまだ及ばない。

その実像に迫るために、本稿では、あえて埴輪製作者の人数や製作期間などに具体的な数字を示した。そうした印象なくしては、生産の継続といった表現も空虚なままで、議論が積み重ならないように感じるからだ。組織編成の具体を実証的に究明し、古墳間で比較検討する路の先に鮮やかな景色がひらけると信じる。

謝 辞

成稿にあたって下記の諸機関・諸氏にお世話になりました。記して謝意を表します。

京都市文化市民局、京都市埋蔵文化財研究所、京都府埋蔵文化財調査研究センター、長岡京市教育委員会、長岡京市埋蔵文化財センター、奈良文化財研究所、伊賀高弘、大高義寛、熊井亮介、黒須亜希子、丸川義広、中島皆夫、丹羽崇史、原秀樹、山本輝雄、山本雅和（五十音順、敬称略）

本稿は日本学術振興会科学研究費補助金 J230107040 の成果の一部である。

註

- (1) 旧稿（和田 2024）にしたがい、内面調整を基準にナデ調整のⅠ類、ハケ調整のⅡ類に大別し、Ⅰ類を口縁部内面もナデ調整のⅠa類とハケ調整のⅠb類に細分する。
- (2) 井ノ内車塚古墳では、未報告資料を含めた 38 個体を分析した結果で、悉皆的に検討できたわけではない。実測図が公表されている 8 個体に限ってハケメパターンを提示しておく。
- (3) 向日系譜の物集女車塚古墳（方円 48m）も同時期の首長墳だが、断続ナデ技法 B をもつ円筒埴輪は異系列と理解できるので、ここでの検討には含めないでおく。
- (4) 未報告資料を含めた 200 個体の分析を試みた結果で、完遂できていない不十分なものである。実測図が公表されているうちの一部のみ、ハケメパターンを提示しておく。

引用・参考文献

- 瀬川貴文 2005 「古墳時代後期の木棺とその多様化」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団、大阪：pp. 425-445
- 高橋克壽 1994 「埴輪生産の展開」『考古学研究』第 41 巻第 2 号 考古学研究会、岡山：pp. 27-48
- 都出比呂志 1983 「古墳時代」『向日市史』上巻 向日市、京都：pp. 117-208
- 原田昌浩 2017 「山城盆地北部における古墳時代後期の埴輪生産」『埴輪論叢』第 7 号 埴輪検討会、大阪：pp. 149-166
- 廣瀬 覚 2023 「埴輪生産の進展と王権」『埴輪生産からみた地域社会の展開』古代学研究会、大阪：pp. 289-298
- 吉田恵二 1973 「埴輪生産の復原—技法と工人—」『考古学研究』第 19 巻第 3 号 考古学研究会、岡山：pp. 30-48
- 和田一之輔 2024 「冢山 1 号墳の埴輪生産体制をめぐって」『冢山 1 号墳発掘調査報告書』京都府教育庁、京都：pp. 68-85

※紙幅の都合で参考文献に発掘調査報告書の掲示を割愛した。ご容赦いただきたい。

挿図出典

図 1 ～ 8：筆者作成（ただし、埴輪の実測図は発掘調査報告書等から一部改変して掲載）